印環細胞癌

—— 乳腺原発と考えられた印環細胞癌の1例 ——

—— 森 勝典* 安藤 巖夫* 久木田 淳* ——

Summary

We reported a case 87-year-old man of signet ring cell carcinoma. He had developed increasing numbers of indurated erythema on the left chest, abdomen, shoulder, and upper arm for about a month. Histologically, aggregated tumor nests were noticed in dermis and subcutaneous tissue. Tumor cells presented signet-ring-cell like appearance which exhibited infiltrating lobular carcinoma like arrangement. Immunohistochemically, the tumor was positive for CA15-3 and negative for estrogen receptor and progesterone receptor. Autopsy showed that there were no primary tumor in viscera. From clinical and histological findings, we diagnosed this tumor as signet ring cell carcinoma of the breast. This is the first report of signet ring cell carcinoma of the breast of the male in Japan.

Key words : Signet ring cell carcinoma, Breast cancer, Male, Skin metastasis

はじめに

印環細胞癌は、胃癌に最も多く、ついで結腸などの消化管癌や膀胱癌に多くみられ、乳腺原発のものは、本邦ではこれまで30数例が報告されているだけである¹⁾²⁾。今回我々は、男性の胸部に生じ、他臓器に原発巣がみられなかったため、乳腺原発と考えられた印環細胞癌の1例について報告する。

症 例

患 者：87歳，男

初 診：平成10年3月23日

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：脳梗塞，老人性痴呆症

現病歴：1ヵ月前より，左胸部に紅斑出現したが，自覚症状なく放置していた。その後，紅斑は徐々に拡大し，左上肢を中心に浮腫を生じたため，当科受診となった。

初診時現症：左前胸部から側胸部にかけて，板状硬の紅斑が広範囲に存在し，一部に表皮萎縮，びらん，出血をともなっていた。左肩，上腕，背部にも小豆大から貨幣大の浸潤の強い紅斑，結節が散在していた（図1）。

* Katsunori MORI, Iwao ANDO, Atsushi KUKITA :
帝京大学附属溝口病院皮膚科

図 1. 初診時現症

図 2. H.E. 染色

表 1. 免疫組織学的所見

抗CEA抗体	陽性
抗EMA抗体	陽性
抗CA15-3抗体	陽性
抗エストロゲンレセプター抗体	陰性
抗プロゲステロンレセプター抗体	陰性

病理組織学的所見：真皮から皮下にかけて腫瘍細胞巣が存在した。腫瘍細胞は索状に配列し、細胞間には膠原線維の増生がみられた。腫瘍細胞は、約半数が豊富な細胞質と圧排された核を持つ印環細胞であった（図2）。

免疫組織学的所見：各種免疫染色の結果を（表1）に示した。

血液検査所見：初診時の血算、生化学、および腫瘍マーカー検査の結果を（表2）に示した。

その他の検査所見：その他、胸水細胞診にて adenocarcinoma class V, 胃内視鏡にて慢性萎縮性胃炎、大腸内視鏡および生検にて大腸ポリープ（中等度異型）、胸部CTにて、胸壁に広範囲な mass, リンパ節腫張、胸水の貯留ありと診断されたが、左胸部以外に内臓の悪性腫瘍は発見されなかった。

治療および経過：生検結果より、内臓悪性腫瘍の皮膚転移、特に消化器系の癌の転移を疑い、平10年5月、原発巣の精査目的で当院内科入院となった。胸水貯留にたいして mitomycin 50mg 注入、上大静脈症候群による左上肢の浮

腫にたいして放射線照射 39Gy を施行した。諸検査施行するも、左胸部以外に原発巣は発見されず、同部の乳腺由来であることが強く疑われた。このため、同年6月より doxifluridine, fadrozole hydrochloride hydrate, tamoxifen 内服による治療開始したが、まもなく全身状態悪化し同年7月肺炎のため死亡した。

剖検結果：

- 左乳房部中心に、22×22cm の胸壁皮下腫瘍を認めた。
- 胸壁から、縦隔、心嚢、左肺門部、横隔膜に連続性の浸潤が認められた。
- 左上腕、腸管壁、副腎周囲脂肪織、小骨盤腔に転移が認められた。両肺野全体にも微小な転移を認めた。
- 消化器、前立腺などについて原発巣は見い出されなかった。

考 按

印環細胞癌は、胃癌に最も多く、ついで大腸癌、食道癌、膀胱癌に多くみられる。その他、乳癌、胆嚢上皮癌、Meibom 腺癌、胸部中皮腫での報告が散見されている。

自験例では、1) 主病変が、左乳輪部を中心とする、皮下から胸壁の腫瘍であること、2) 他部位に原発巣と思われる病変が存在しないこと、3) 腫瘍細胞の配列が乳癌の小葉浸潤癌に

表 2. 血液検査所見

WBC	2800/ μ l	CEA	0.4 ng/ml
RBC	304X10 ⁴ / μ l	AFP	<0.3 ng/ml
Plt	24.9X10 ⁴ / μ l	CA19-9	3.6 U/ml
HB	9.9 g/dl	CA125	157.1 U/ml
ESR	59mm(1 hr)	CA15-3	6.8 U/ml
prothrombin time	13.5 sec	PAP	0.7ng/ml
Fibrinogen	390.1 mg/dl	PA	28.0 ng/ml
TP	6.4 g/dl	γ -SM	79.0 ng/ml
Alb	3.5 g/dl	NCC-ST-439	725 U/ml
GOT	19 IU/l	BCA-225	33.3 U/ml
GPT	8 IU/l		
LDH	323 IU/l		
ALP	204 IU/l		
BUN	18.3 mg/dl		
Creatinine	0.9 mg/dl		
Na	141 mEq/l		
K	4.3 mEq/l		
Cl	107 mEq/l		
CRP	2.8 mg/dl		

類似していること、4) 乳癌に比較的特異的なマーカーである CA15-3 抗体による免疫染色が陽性であったこと、などから総合的に判断して、乳腺原発であると考えた。また、鑑別として adenocarcinoma with signet ring cells of the axilla があげられたが、組織学的にアポクリン腺様の構造を示す箇所がないことと、腋窩自体には腫瘍がないことより否定的であると考えられた。

板状硬のびまん性紅斑という皮膚転移の臨床像も、遠隔部からの転移というより、近隣臓器からの連続浸潤あるいはリンパ逆行性転移でよくみられる臨床型である。

乳腺原発の印環細胞癌は比較的特異的であり、欧米では全乳癌の 2.5~4%、本邦では 30 例が報告されているのみである¹⁾²⁾。これは、欧米での乳腺原発の印環細胞癌とする基準が、腫瘍細胞全体の 20%³⁾、強拡大で 20 個の印環細胞であるのに対し⁴⁾、本邦では、腫瘍細胞の大半が印環細胞であること、消化器からの転移が否定されていること⁵⁾。といった厳しい条件が必要とされることによると考えられる。

また本邦での乳腺原発印環細胞癌の症例は、

全てが女性の症例であり、男性に生じた乳腺原発印環細胞癌の報告は自験例が初めてであった。しかし、男性乳癌の全乳癌に占める割合がおよそ 1% 程度であり、これまでの乳腺原発印環細胞癌の報告が 30 数例であることを考慮すると、特に乳腺原発の印環細胞癌が男性に稀というわけではないと考えられた。

文 献

- 1) 前川博, 渡部修, 片見厚夫, 他: 顔面皮膚転移を契機に発見され炎症性乳癌を呈した乳腺印環細胞癌の 1 例. 日臨外医会誌, 57: 1352-1355, 1996.
- 2) 館花明彦, 福岡英祐, 宇井義典, 他: 乳腺原発印環細胞癌の 1 例. 臨外, 51: 1221-1225, 1996.
- 3) Hull, M.T., Seo, I.S., Battersby, J.S., et al.: Signet ring cell carcinoma of the breast. A clinicopathologic study of 24 cases. Am. J. Clin. Pathol., 73: 31-35, 1979.
- 4) Merino, M.J., Livolsi, V.A.: Signet ring carcinoma of the female breast. A clinicopathologic analysis of 24 cases. Cancer, 48: 1830-1837, 1981.
- 5) 石原明徳, 上森昭, 木村多美子, 他: 乳腺原発印環細胞癌の 1 例. 日臨細胞会誌, 25: 764-769, 1986.